

豊公謡曲

明智討

時 所 京  
六 月

シテ 羽柴秀吉  
トモ 徒者  
ワキ 明智光秀

「急ぐ行方はひまの駒。／＼。雲井にかける心かな。

「是は羽柴筑前守秀吉なり。さても我君征夷將軍信長公。西国追討の事其仰を蒙り。天正十年の春より。備中表敵軍対陣候ふ処に。明智日向守逆心を構へ。將軍を討ち奉るよし注進候ふ間。急ぎ光秀が頭を刎ねうずるにて候。

サシ  
「頃は水無月初つかた。多勢の敵を従へつゝ。既に打ち立つ雲水の。流れて早き年の矢の。勇む心にまかせ行く。跡はるぐの備中や。備前表をかへりみて。

歌  
「五更の天も明石渴。／＼。須磨の浦風立ちまよふ。雲より落つる布引の。滝の流れも遙なる。芦屋の灘も打ち過ぎて。難波入江のみをはやみ。芥川にも着きにけり。／＼。

「暫く此処にて諸卒を揃へ。敵の中へ切つて入り。彼逆徒を討つて將軍の供養に備へばやと存じ候。

如何に誰がある。

トモ  
「御前に候。」

シテ  
「皆々近う寄つて物語を聞き候へ。」

クリ地  
「抑人間界と申すは。佳月光りを顯はせば。狂雲之  
を妬み。王者明かならんとすれば。又讒臣之を掩  
ふとかや。」

シテサシ  
「さて光秀が行跡といつぱ。外には柔和忍辱の姿。」

地  
「内には逆心無道の。心の奥は白真弓。」

シテ  
「もとより君の身を任せ。」

地  
「やみくと討たれ給ふ。御運の程こそ悲しけれ。」

クセ  
「されば秀吉は。名におふ城の高松に。水せきかけ  
て攻めて寄る。波にしづめてうたかたの。あはれ  
を掛け後詰の。其猛勢に取り向ひ。攻伐既に半  
ばなるに。將軍討たれ給ふぞと。注進ひそかにあ  
りしより。肝たましひも消え返り。涙に咽ぶばか  
りなり。心弱くて叶はじと。いよ／＼陣を取り寄

せ。味方の胸を静めんと。一首の歌にかくばかり。

シテ  
「両川の。一つになりて落ち行けば。

地  
「もり高松も藻屑なりけりと。よむ言の葉に違はず。

城主腹を切りぬれば。其援兵も退けて。文武の道  
を兼ね備へ。涙の屯を引き払ひ。夜を日について  
登りつゝ。敵を討たん心ざし。感ぜぬ人はよもあ  
らじ。

シテ  
「然るに楚国の懷王の。項羽に討たれ給ふ時。

地  
「漢の高祖は之を聞き。烏江の流れ打ち渡り。主君  
の敵を討ち給ひ。四海を静め給ふ事。是天命にあ  
らずや。それは七十余度の戦。今は一戦にて本懐  
を。達すべきとのものゝふの。やたけ心ぞ恐ろし  
き。

シテ  
「時刻移して叶ふまじ。日影を見れば斜なる。雲の  
旗手の天つ空。水なき月の水無瀬川。山もとつた  
ひ山崎の。宿の東に打ち出だし。敵陣近く寄せて

ワキ ゆく。

「抑是は。明智日向守光秀とは我事なり。

詞  
「某一たび天下に心を掛け。名を後代に留めんがため。將軍を討ち奉つて候。然る処に羽柴筑前守馳せ向ひ候ふ間。

カール 「一戦に及び勝負を決すべしと。

地  
「言ひもあへぬに寄手より。声々鬨を作りかけ。刃を揃へてかゝりけり。

ワキ 「其時光秀は。先勢早く崩るれば。叶ふまじとや思ひけん。先づ勝龍寺に逃げ籠り。日も呉竹の夜に入りて。物あひ見えずなり果てゝ。敵の人数に打ちまぎれ。淀鳥羽さして落ち行くを。秀吉追ひ掛け給ひつゝ。何くまでかは遁すべきと。甲の真向打ち割り給へば。足弱車の廻る因果は。是なりけりと。思ふ敵に白波の。寄りては討ち返りては討ち。たゞ重ねて百たび千たび打つ太刀

に。今ぞ恨も晴れてゆく。天下に名をも賜る身の。  
忠勤こゝに顯はるゝ。威光の程こそゆゝしけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『謡曲評釈 第九輯』大和田建樹著